「仏鬼軍絵巻」の成立環境
― 十念寺本を中心に ―

大澤茉歩（早稲田大学）

京都・十念寺蔵「仏鬼軍絵巻」（一巻、紙本淡彩、以下、十念寺本）は、極楽の仏菩薩と地獄の閻魔王や獄卒との争いを主題とする絵巻である。先行研究においては、16 世紀頃に制作された異類合戦物のお伽草子絵巻と位置づけられている。現状の十念寺本は、物語の途中から始まる構成となっており、伝来過程において前半部分の詞と絵を欠失したものと考えられる。近年紹介された、京都大学文学研究科図書館蔵の詞書のみの写本（一冊、以下、京大文研本）と、これまで未紹介であった早稲田大学図書館蔵の白描模本（二巻、以下、早大本）は、いずれも十念寺本に欠失する前半部分を有しており、ここから十念寺本が完本であった際の内容を復元することができる。本発表では、これらの伝本により判明した詞書及び画面内容の分析を通じて、「仏鬼軍絵巻」の成立環境と、十念寺本の制作年代を考察する。

はじめに、京大文研本・早大本を通じて物語の全容を明らかにし、詞書に見られる仏典や仏書、また仏教説話からの影響を指摘する。詞書前半では、阿弥陀如来と文殊菩薩が地獄へ攻め入るための方便を協議する場面と、これに対する閻魔王・獄卒の主張及び地獄の責め苦の様相が詳述される。このような「仏鬼軍絵巻」の内容と近しい構造を有する仏教説話が、13 世紀後半から 14 世紀にかけていくつか成立している。なかでも、14 世紀半ばの成立と見られる『無明法性合戦状』には、「仏鬼軍絵巻」詞書と共通する文章構成を見出すことができる。さらに、詞書に見られる地獄と極楽は本来同質であるという主張、唐代の天台僧湛然（711-782）による『金錍論』や『本覚讃』の引用という特徴は、いずれも天台本覚思想と深く結びついている。また、これらの経文や偈の引用個所を精査すると、原典を広く渉猟して集成されたものというより、伝源信『観心略要集』や『万法甚深最頂仏心法要』など、平安時代後期から鎌倉時代にかけて、源信ら日本天台宗の高僧に仮託して成立した仏書を通じて間接的に参照されたものであることが分かる。以上の考察から、本発表では「仏鬼軍絵巻」の詞書テクストの成立を、本覚思想が普及し、『無明法性合戦状』など類似説話が形成された 14 世紀半ばと位置づける。

その上で、最後に十念寺本の絵画様式を分析する。従来、中世末期の成立と考えられていた十念寺本であるが、一部の人物に「玄奘三蔵絵」と近似する面貌表現が見られ、地獄や獄卒の描写には「矢田地蔵縁起絵巻」や初期の「融通念仏縁起絵巻」と類似する表現が確認できる。本発表では、このような 14 世紀絵巻作例との絵画様式上の共通性から、十念寺本自体の制作年代についても、中世前半に遡り得る可能性を提示する。